

昭和22年の大水害

「災害は忘れた頃にくる」という諺ことわざがある。市では防災対策について、現在市民各位に説明会を開いて啓蒙に努めている。去る十月十九日には台風二十号によつて、市内でも思わぬ災害を受けた方がたも多かったようである。

災害で思い出されることは、昭和二十二年九月の関東地方の大水害である。第二次世界大戦終了後二年目、二百十日も無事に過ぎてみよりの秋を楽しみにしていた折柄、九月十四、十五の両日に猛烈な台風（キャスリン台風という）が襲来した。山間部の雨量が六〇〇ミリメートルを越す雨台風であった。

建築中の春日部中学校が倒壊したが、市内には予想するほどの被害はなかった。住民はこの台風による被害がこれ以上ないように祈る気持ちであつたが、無情にも、十五日夜半のラジオ放送は利根川堤防の決潰けつかいを急報したのである。

市内の河川、溝等も前夜来の豪雨のため増水していた。幸い十六日は晴天となり、天候は一安心であつたが、利根川の決潰による洪水に一抹の不安があつた。

春日部町消防本部は、状況把握のため消防車（V8フォード三輪車）を出動させ、栗橋町方面の視察を行なった。消防車が四号国道を北上し、幸手町の入口にある川に達した時、川上から溢水いっすいしているのを発見し前進をあきらめ引き返そうとしたが、溢水は激しく車輪の半分位まで水没する深さになっていた。消防車は、早急に現地を引き揚げ帰路についた。

帰途、スピードを出してちょうど小渕橋付近に差しかけた時、水の奔流するごうごうという音が聞こえて来、新町橋に到着したときには古利根川の水は橋げたの近くまで増水していた。早速、本部（町役場）に入り、各分団に連絡（粕壁四個分団と内牧一個分団）、さらに青年会、町内会役員の出動を求めて現況を説明し、水防計画を立て作業に入った。

もうこの時は古利根川は溢水していて幸松方面への浸水は始まっていた。当初、新方領水防組合の常備機材（元新宿に保管）を使用して喜蔵堤（元新宿・川久保地内）の補強に主力を傾注し、土俵で堤のかさあげをし、古利根川の溢水防止に努めたのである。

夜に入るにつれ、元荒川流域の増水の影響を受けて古隅田川方面が危険となり、江曾堤の築堤補強にあたった。しかし土俵の材料である俵が不足して、資材調達に困難をきわめた。幸いにも旭町の山田半六商店の倉庫に専売局ヘリンク制で返納しなければならぬ塩かますの空吠かますがあることに気づき、山田半六氏の好意により在庫の空吠で土俵を作り春日部中学校校庭内にあった江曾堤を補強し、また浜川戸地内では梅田橋際で県道を締め切って古隅田川の氾濫はんらんを防ぐことができた（村田本家の裏と反対側の本田タバコ店脇に江曾堤が残っていた）。また豊春地内でも南中曾根の見晴屋付近の江曾堤を利用して、県道岩槻線を締め切り古隅田川の溢水を防ぐことができた（春高付近は鹿島池に沿って江曾堤が残っていた）。

つづく

初出「広報かすかべ 昭和五十四年十一月」かすかべの歴史余話